



第19回シアター公演

Shomyo, Heavenly Voices

# 聲明



Photo(c)Michael Kneffel



## はじめに

僧侶に期待される資質には様々ある。知識が優れ、徳が高い僧侶は当然尊崇を受ける。しかし、美しい姿かたちや端正な顔立ちを持ち合わせている僧侶もそれに劣らず高い資質と認められ得る。思わず手を合わせたくなる美しい青年僧はいつの時代でも仏教信者の憧れなのである。しかし、知識や徳、そして姿形にも増して重要な僧侶としての要素は、経文を唱えるその音声の神々しさであろう。引き込まれるような穏やかな読経の響きは、深い信仰心を無条件に引き起こす力がある。「あのお坊さまの読経の声に惹かれて信者となった」という人は意外と多いのである。

聲明しょうみやうにはこの冊子でも縷々説明されるように、様々な芸術的要素が盛り込まれている。当然歌詞は経文や讃仏さんぶつの文が主となるので、意味内容の理解が重要でないとは言わないが、私には音波として我々の脳に直接働きかける点がより重要であると思えてならない。

公演に際しお世話になった各方面の関係者の皆様に感謝しつつ、今日はこの会場にお迎えした仏菩薩にゆつたりと心を預けて時間を過ごしてみたいと思います。

佛敎大学宗敎文化ミュージアム

館長 小野田 俊蔵

## 音楽としての聲明

聲明とは仏教における声の音楽を意味しますが、鑑賞音楽芸術として一般に認識されるようになったのは、公共空間での舞台公演として紹介されてからのことです。それまでは、聲明という言葉そのものも、現在使われているような包括的な意味合いではなく、狭いジャンルのものを指していました。長い間、聲明はサンスクリット語で歌う梵讃<sup>ぼんざん</sup>、唐音<sup>とういん</sup>で歌う漢讃<sup>かんざん</sup>などの外来の曲を指す言葉として狭い意味で使われていたのです（『声明1』）。

最初に聲明公演が行なわれたのは一九六六年、国立劇場においてでした。そのとき紹介されたのは天台聲明です。以後、ほぼ毎年公演が行なわれ、現在まで四七回を数えます。それぞれの公演の内容は、仏教諸宗派の聲明の他に、高橋悠治、石井真木、近藤譲、ジャン・クロード・エロアといった現代音楽の作曲家に委嘱された作品も含まれます。以来、博物館の仏像や寺院建築が芸術として鑑賞の対象になるとと同様、かつては寺院の中でのみ行なわれていたものが、日本の伝統的芸術音楽として知られることになりました。また、海外における公演も盛んに行なわれるようになり、英語のShomyoという言葉も定着しています。

では、聲明を音楽としてみた場合、どんな特徴があるのか。おおまかに以下の点が挙げられます。

### 聲明はモノトーンの響き

西洋音楽の三要素のひとつであるハーモニー（和声）は、異なった音を同時に重ねた場合の響きの美しさを鑑賞するという考え方に基いています。ドミソとかシレソといった和音のことです。西洋音楽は、その響きの多様さを究極にまで発展させてきました。この考え方は、今日のわれわれをとりまくほとんどの音楽で一般的です。

しかし、聲明はハーモニーに基づく音楽ではありません。旋律が線的に動く単旋律の音楽です。ハーモニーによる西洋音楽がフルカラーとすれば、聲明はモノトーンの音楽といえます。西洋のカノンのように同じ旋律をずらして追いかける「次第取り」という歌い方では異なった高さの音が重なる場合もありますが、重なりによって響く美しさを意識しているわけではなく、たまたま重なっただけです。

聲明の起源は、もともと古代インドのバラモンたちが行なっていたヴェーダの詠唱にあります。初期のヴェーダ詠唱はアルチカと呼ばれるスタイルで「詠われ」ていました。いわゆる棒読みの読経で、われわれにも一般に馴染みのあるものです。ついで二音のガーティカというスタイルが現れ、さらに三音、最終的には七音へと詠唱に用いられる音の数が増えていきました。音数は次第に増えましたが、音楽の基本構造は変わりません。旋律はある一定の高さの音から始まり、その周囲を上下しつつ、始まったのと同じ音で終わります。

この中心となる一定の高さの音を核音<sup>かくおん</sup>と呼んでいます。音数が多いということは、核音の上下の範囲が広がることです。三音の場合、核音を中心とした上下各一音を使って歌われます。古代インドでは、三音はスヴァリタ（核音）、ウダーッタ（一音高い音）、アスダーッタ（一音低い音）という名前と呼ばれていました（『インド音楽序』）。

ヴェーダのこのような音楽的構造は、聖典の詠唱ばかりではなく、インドの一般の音楽でも基本的に同じです。現代のインド古典音楽は、その最も高度に発展した形の音楽です。したがって、現在日本で詠唱される聲明とインドの音楽は、古代インドのヴェーダ詠唱から発展したという共通点があるのです。わたしがインド音楽を学んで帰国してからのこの共通点を再認識したことが、聲明の舞台公演グループである「七聲会」をプロデュースし、国内外で公演を制作したり、一緒に演奏したりすることにつながっています。

異なった音を重ねずに歌う、つまりハモらない、核音を中心として旋律が上下する音楽は、聲明だけではありません。先に挙げたインド音楽はもとより、日本を含めた東アジア、東南アジア、西アジアの伝統音楽がほとんど同じ特徴を持っています。むしろハモる音楽の方が特殊といえます。

## 聲明のリズム

聲明は歌いながら、あるいは聴きながら一緒に手拍子を打つことができないものがほとんどです。聲明は、ひとつひとつの音を長く伸ばしたり、滑らかに上下に揺らせたりしながらゆっくりと歌われます。旋律の区切りはたいがい息継ぎの部分です。手拍子の打てない音楽は、西洋音楽の定義でいえば自由リズムの音楽ということになります。このような音楽は一般的な西洋音楽にはありません。

では聲明のような自由リズムの音楽が珍しいかといえれば決してそうではありません。追分節といわれるような民謡や尺八の古典本曲などの日本の伝統音楽にも多くみられます。また、モンゴル民謡のオルテインドー、トルコ民謡のウズン・ハワー、ペルシア古典音楽のアーヴ

アーズ、インド古典音楽のアーラップ、ハンガリーのパルランド・ルバートといったスタイルの音楽もそうです。

もつとも、普通の読経では木魚などで一定間隔の拍子が刻まれるし、聲明にも手拍子が打てる定曲というものもあります。ですが、それらは非常に少ない。

手拍子の打てる音楽と打てない音楽が併存するあり方は日本ばかりでなく、ユーラシア大陸全域に広がっています。

## 聲明で使われる音階

聲明の旋律の骨格はほとんどが五音音階でできています。

五音音階とはなにか。西洋音楽ではピアノの鍵盤を見れば分かるように、一オクターブには白鍵七つ、黒鍵五つの合計一二の音が配置されています。五音音階というのは、これら一オクターブの中の五つの音からなる音階のことで、英語ではペンタトニックといいます。

聲明の代表的な音階は律と呂です。「酒に酔って呂律が回らない」の呂律です。律と呂の音階を、ドを核音とした場合の西洋音階におおまかになぞらえると以下ようになります。

律 ド レ ファ ソ シ

呂 ド レ ミ ソ ラ

聲明の曲では律と呂の他に、七音を使う中曲という音階も使われます。また、ある音から上下する際に経過的に半音が使われる場合があります。浄土宗の聲明はほとんどがこの律と呂の音階が使われますが、まれに陰旋法という特有の音階も使われます。

陰 ド レ フア ソ ラ

この音階は民謡や歌舞伎の音楽などによく使われ、一般には都節音階と呼ばれています。

このように、聲明の旋律の骨格は五音音階で成り立っていますが、実は日本の伝統音楽においても同じことが言えます。こうした音階や特有の節回しなどの共通性から、日本の声による伝統音楽は聲明が原点だといわれています。

### 聲明の声の魅力

女性僧侶による聲明はまったくとはいえませんが、ほとんどの場合、聲明は男性僧侶の地声によってユニゾンで歌われます。とても単純な合唱です。ところが、日常的な読経によって鍛えられた僧侶の



聲明の音階 (『魚山螢芥集』より)

声が重なり合うと、まるで女性の声のような高音の倍音が同時に立ち現れてきます。人間の声は、ある高さの音を出しているつもりでも同時にいろいろな高さの音が出ているからです。これを倍音といっています。西洋音楽の合唱では倍音が強く響くとハーモニーが濁ってしまうので、できるだけ倍音の出ない特殊な発声法で歌うのですが、聲明は僧侶の自然な地声で歌われます。

この倍音による濃密で美しい音響空間が聲明を魅力的にしている一つの要素です。東大寺僧だった凝然(一三二二年没)の『聲明源流記』にある「声相清雅にして諸人に耳を悦ばしめ音体哀温にして衆類の心を快からしむ」の「声相清雅」や「音体哀温」という形容はまさにこの倍音の響きだったのではないかと思います。



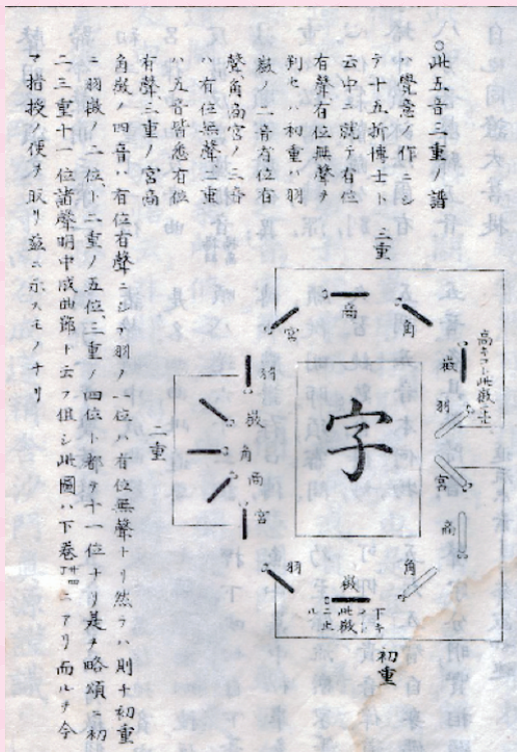
聲明の音組織 (『魚山螢芥集』より)

## 聲明の記録と伝承

西洋音楽に五線譜があるのと同じように、聲明にも博士<sup>はかせ</sup>という独特の楽譜があります。經典の漢字の横に音の高さや節回しを書き表したものです。

節回しはすべて型で示されます。たとえば、ユリ、ユリ上げ、スグ、イロマワシなど数多くあります。ユリとは音を揺らすこと。ゆっくりとしたビブラートです。ユリ三という指示があれば、三回揺らす。スグはまっすぐに伸ばす。このように、型は音の動きを表しますので、それを覚えてしまえば音高の指示に従ってどのように歌えばよいかに分かります。天台聲明にはこうした型が四二種類あります。

ただし聲明は先に触れたようにほとんどが自由リズムの音楽なので読み取る人によって違いが出てきます。博士では伸ばす音の長さや揺らし加減を正確に記録することはできないのです。そのため、聲明の



博士の解説(『魚山薑芥集』より)

伝承には博士の解説とともに口伝がどうしても必要になってきます。したがってある程度きちんと訓練されなければ聲明を歌うことは難しい。普通のお坊さんではできないのです。

聲明は、このように師匠から弟子への口伝でこれまで長い間伝承されてきました。しかし、これからもずっと伝承されるかどうか分かりません。聲明は仏教儀式に付随する音楽ですから、儀式の機会が減少してくると当然聲明の出番も少なくなります。宗派によっては儀式の音楽として西洋音楽様式のものも使われています。こうした状況に危機感をもつ仏教関係者も少なくありません。

聲明は一〇〇〇年以上の長い歴史をもつ現存する世界最古の音楽のひとつであり、日本の伝統音楽の原点でもあります。また、内外の作曲家から音楽としての価値が高く評価され、さまざまな作品に取り込まれています。仏教各宗派内の伝承の維持も大事ですが、舞台公演などを通して今後も多くの人々の「耳を悦ばしめ」「心を快からしむ」ことを願ってやみません。

中川 博志

# 浄土宗の聲明

聲明とは法要の際、佛典に節をつけて唱える仏教音楽のひとつである。浄土宗の聲明は、大別すると知恩院を中心とする関西の総大本山において伝承されている祖山流①と言われるものと、増上寺を中心とする関東の大本山が伝承している縁山流②の二流がある。

二流とも元は天台宗大原魚山の流れを汲むものであった。承應二（一六五三）年、魚山大原寺向之坊恵隆により魚山の墨譜が増上寺に伝えられており、明暦二（一六五六）年増上寺貴屋は上京して、恵隆及び京都の聲明家数人を縁山に招いている。現在ではこの墨譜が『浄土宗法要集』巻末に載せられている（図1・2）。このことから一七世紀以前の増上寺は、知恩院と同じ大原魚山の聲明を伝承していたと考えられる。現在の増上寺で唱えられている聲明は、大原魚山の聲明とはまったく趣を異とし、縁山流として一八世紀から一九世紀以降独自に発展したものと考えられる。

今回、佛教学宗文化ミュージアムで公演される聲明は祖山流、つまり知恩院伝承の聲明である。

## 知恩院伝承の聲明

知恩院では宗祖法然上人の五〇年毎の遠忌法要をはじめ、大法要が近づくとき魚山や延暦寺より天台聲明の指導者を招き、式衆の稽古が始まったものである。法然上人は比叡山で修学され、師の叡空上人は天台聲明の中興と言われる。良忍上人の高弟であったことから、知恩院

の聲明は天台聲明を伝承してきた。昭和四九（一九七四）年浄土宗開宗八〇〇年慶讃法要を最後に、それ以降は知恩院式衆会独自で稽古をしている。

式衆とは知恩院（他の大本山にも存在）の大法要や、特殊な法要に専門的に出仕して法要を勤める浄土宗法儀の専門家である。

浄土宗の聲明は知恩院をはじめ、各本山の式衆によって伝承されているが、日常の勤行では聲明を唱えないので、浄土宗の一般僧侶は聲明に接する機会はほとんど無い。

聲明を唱えるのは、本山の式衆や聲明研究会などに所属している極めて専門的な僧侶達である。

筆者が聲明に出会ったのは昭和四八（一九七三）年、知恩院の浄土宗開宗八〇〇年慶讃法要の前年であった。三週間に亘る大法要が勤まるので式衆が足りず、知恩院では法要係を養成するために、住職をして間のない筆者も駆り出されたのである。開宗八〇〇年慶讃法要奉修にあたって、天台宗より聲明の無形文化財保持者中山玄雄大僧正の指導を賜った。

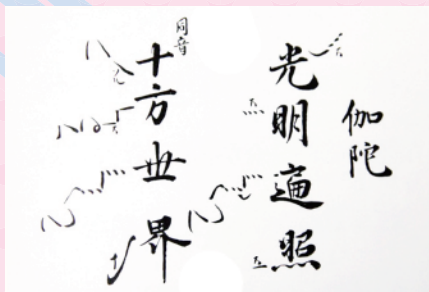


図1 恵隆が増上寺に伝えた墨譜（『浄土宗法要集』より）

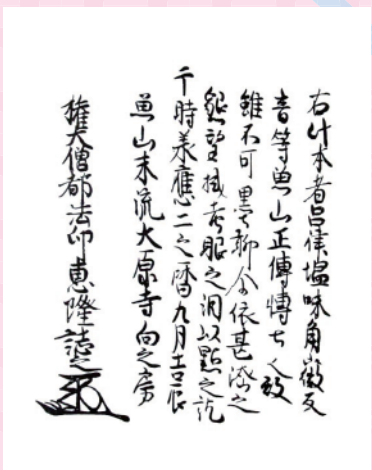


図2 恵隆の奥書（『浄土宗法要集』より）

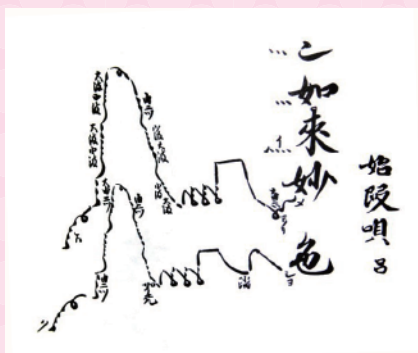


図3 博士



図4 回旋譜

かた、散華、梵音、錫杖、甲念仏、引聲阿弥陀經、五念門、回向文  
 等初めて耳にする聲明に深く感動し、生命に染みいる声の響きに強く  
 ひかれた。

これを機に知恩院式衆会、聲明研究会である出音会しゅつとんかいで浄土宗法儀  
 司宍戸栄雄師に師事したのである。

もともと聲明は、博士はかせという墨譜ぼくふ（図3）によって唱えられていたが、これは師僧より指導を受け、墨譜に朱で憶えを書き込み、師僧の唱え方を丸暗記し、師僧の息を吸ってお稽古をするという方法（口伝）であった。

これに対し、当時宍戸栄雄師によって考案された回旋は譜旋律（図4）が図形的に記譜され、初学の者にとっても理解しやすく、唱えやすくなり、聲明を志す人の裾野がずいぶん広がった。

しかしあくまでも回旋譜は目安であり、聲明の伝承は師僧の教えを本義とするものである。

### 誦経は音楽

昭和六二（一九八七）年知恩院では三上人遠忌法要が勤められ、御影堂前の舞樂台では中川博志氏企画の「天楽西来」という音楽法要（写真1、図5）が行なわれた。



写真1 天楽西来の舞樂台



図5 天楽西来のポスター

「阿弥陀經」の「百千種樂 同時俱作 聞是音者 皆自然生 念仏念法念僧之心」（極樂世界では多くの楽器が同時に奏でられ、この音楽を聴く者は感動し、自ずから三宝帰依の心が生ずる）という。まさにこの経文を体現した様なインド、中東、中国などのシルクロードの道々の楽器やシンセサイザーとお経を和奏する音楽法要であった。

旋律を奏でる多くの楽器と一緒にお経を唱えるのは初めての経験で、目から鱗が落ちる思いであった。現代人にとって誦経は非音楽的なものと考えられがちである。しかしこの音楽法要では、声が堆積、共鳴し、倍音が響き、なんと素晴らしい音楽であると強く感じたのである。「天楽西来」での誦経の力強い声は、楽器の奏でる節、音色や拍子と組み合わせられ共鳴し、厳かな音楽空間を形作っていた。『日本往生極楽記』の「音楽空に遍く、香氣室に満てり」の感であった。



その後、平成七（一九九五）年六月、中川氏の依頼を受け、「完成期医療を考える会」神戸フォーラムの開会式で阪神淡路大震災犠牲者の鎮魂の儀式を行なった。この時に七聲会が発足したのである。「天楽西来」以来、参詣者や聴衆に直面して行なう儀礼形式によって、より音楽的に質の高さを求める意識が強くなった。

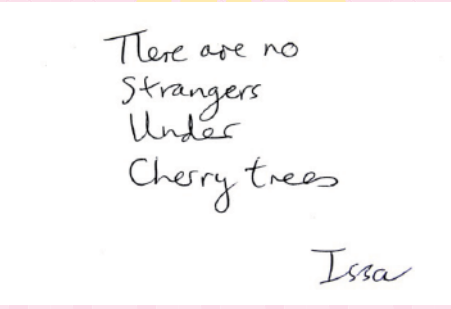
### 聲明念仏の海外公演

平成一二（二〇〇〇）年に開催されるシティ・オブ・ロンドン主催 ミレニアム・フェスティバル（イギリス）に出演しないかと中川氏よりのお誘いを受け、七聲会初めての海外公演が実現した。

これは一〇〇〇年紀を記念して、世界各地より一〇〇〇年以上の伝統ある音楽や芸能をシティの種々の施設において公演すると言うものであった。築八〇〇年以上経っているセント・バーソロミュー・ザ・グレート教会の礼拝堂に聲明と念仏が響きわたった。石造りの高いドーム形の天井に、ステンドグラスを通して

一条の陽光が射しこんで聲明と融合し、実に神々しい気色であった。

ロンドン以外に数ヶ所で公演があったが、ヨークシャー州のブロービー村での公演は印象深いものとなった。人口一五〇人ほどの村で、その内約七〇人が来場した。公演後、一人の老婦人から二〇ポンド紙幣の入った封筒を戴いた。封筒の表には「There are no strangers under cherry tree. Issa」（図6）と



There are no  
Strangers  
Under  
Cherry trees  
Issa

図6 封筒に書かれた一茶の句

書いてあった。「花の陰 赤の他人は なかりけり」という小林一茶の句であった。桜花爛漫の美しさに魅せられて、木陰に集まってきた人たちは同じ感覚を持っており、赤の他人のように思えない。筆者は老婦人のメッセージを「聲明公演を聴いて、国も言葉も宗教の違いも超えて美しい宗教音楽としての聲明に感動しました」と解釈させて頂いたのである。

このことから威儀、衣帯を整え、声を鍛えて法要儀礼を勤めれば、万国共通してその思いは伝わり、共に聖なる空間の中で感動を共にすることが出来るとの思いを一層強くしたのである。

七聲会代表 南 忠信

- (1) 元祖大師法然上人が専修念仏の法門を説かれ、また御入滅の地でもあり、本廟がある知恩院を祖山と呼ぶ所から、知恩院傳承の聲明を祖山流と呼んでいる（『浄土宗聲明CD 祖山流と縁山流』）。
- (2) 京都真如堂の十夜法要を移し、傳承していると言われる鎌倉光明寺の流れを入れ、三流とも言われている。
- (3) 中国の聲明の中心地・魚山に擬えて洛北大原の地、良忍が建立した来迎院や勝林院のある三千院中心とした一帯を魚山といい、天台聲明の根本道場となっている。
- (4) 知恩院二代源智上人、浄土宗二祖聖光上人（鎮西）、三祖良忠上人の三七人遠忌法要。
- (5) 慶滋保胤が著わした我が国最初の往生伝。成立は寛和年間（九八五～九八七）頃と見られる。後続の『往生要集』や『今昔物語集』に多大な影響を与えた。



## 曲目解説

### 笏念仏

縦半分に分った形状の笏を打ち鳴らし念仏「南無阿弥陀仏」に節をつけてお唱えする。

この笏が浄土宗で用いられるようになったのは、当時念仏の叡信がとでも深かった後柏原天皇が、大永四（一五二四）年正月一八日、知恩院超誉存牛上人に対し元祖大師法然上人の御忌を勅修すべき旨の鳳詔をくださった際、御所持の笏を下賜せられ、これを割半して念仏を唱えよ、と命じられたことに由来する。

総本山知恩院の法然上人御忌会では、僧侶が大殿で笏念仏を唱え、行道する。

### 散華

散華とは、法要を勤修する際に花を撒き道場を清め、仏をお迎えする作法である。散華はその際に唱えられる声明である。

散華の歴史は古く、天平勝宝四（七五二）年の東大寺大仏開眼に勤修された四箇法要（四箇とは唄・散華・梵音・錫杖の四曲）に唱えられていた。

散華は、上段・中段・下段の三段から成り、浄土宗では上段のみを唱えることが一般的である。上段は『金剛頂経』による「願我在道場香華供養仏」（我れ道場に在って仏に香華を供養せん）の敬白段であり、「供養」の「供」で紙の花を三度散華する。

中段は、本尊の徳を讃える段であり、釈迦・弥陀・薬師など本尊により異なる文が誦せられる。下段は『法華経』による「願以此功德普及於一切 我等与衆生 皆共成仏道」（讃仏の功德が遍く一切に及び、全ての生きとし生けるもの全てが仏道を成就できるように）との回向段である。

### 回向文

「我等所修 哀愍撰受 西方願王 阿弥陀如来 成正覚 広大慈恩 乃至十方 施主平等利益」と阿弥陀仏への回向に節をつけ唱える。

この声明は、取次第という特殊な方法で唱えられる。取次第とは、句頭師がある程度まで唱えたとところで、大衆が同じ文言を初めから句読師の声に重ねて唱える方法である。つまり輪唱である。

### 三尊礼

浄土宗における法要である「六時礼讃」の一部。

「六時礼讃」とは中国・唐代の浄土教・善導大師の「往生礼讃」に基いて一日を六時（日没・初夜・昼夜・後夜・晨朝・日中）に分けて法要する。

三尊礼は、「日中礼讃」の一部で阿弥陀仏・観音菩薩・勢至菩薩を讃嘆するものである。



# 七聲会しちせいかいの活動

七聲会は、浄土宗総本山知恩院式衆を中心とする僧侶グループ。聲明、法要、儀式を研究し、舞台公演を行なっている。ジーベック・ホール（神戸）でのコンサート（アジアの音楽シリーズ「浄土礼讃とインド音楽」「聲明源流」）、国際サイコロジ学会神戸大会などでインド音楽と共演。一九九六年「アーツ・コラボレーション・プログラム」（愛知芸文センター）で現代舞踊、現代音楽と共演。二〇〇〇年、二〇〇三年、二〇〇四年および二〇〇八年イギリス、二〇〇四年フランス、二〇〇九年オランダ・ベルギー・オーストリア、二〇一〇年イスタンブール、二〇一一年ドイツなど、海外での公演数は五〇回を超える。二〇〇一年『聲明源流』、二〇〇九年『天下和順 PEACE ON EARTH』（ともにMFSレーベル）CDをリリース。

メンバーは、南忠信（大光寺・京都）を代表として、池上良慶（宝泉寺・滋賀）、池上良賢（光照寺・京都）、池上良生（善導寺・大阪）、伊藤真浄（法雲寺・京都）、河合真人（瑞林院・京都）、佐野眞弘（天福寺・福岡）、宍戸崇真（真教寺・京都）、清水秀浩（法楽寺・大阪）、橋本知之（西蓮寺・愛知）、八尾敬俊（善福寺・京都）、和田文剛（専勝寺・三重）。プロデュース、マネジメントは中川博志（HIRROS、バーンスリー奏者、天楽企画主宰）が行なっている。



2004年、ブライトン(イギリス)での聲明ワークショップ



2009年、アントワープ(ベルギー)



2008年、ブラックネル(イギリス)



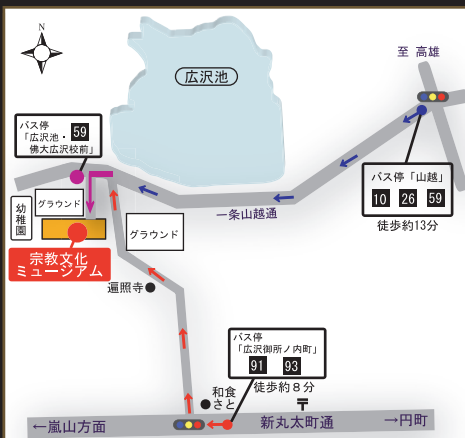
2004年、ティエール(フランス)

## 例言

- 1 本書は佛教大学宗教文化ミュージアム 第19回シアター公演「聲明 Shomyo, Heavenly Voices」(2013年5月25日[土])開催にあたり作成したものである。
- 2 本書掲載写真は、中川博志(本学非常勤教師)より提供を受けた。
- 3 本文の執筆は中川博志、南忠信(七聲会代表)が行ない、編集は柿本雅美(本館ポスト・ドクター)が行なった。
- 4 本書掲載の写真に関して、本学、本館、提供者の許可なく転載・複製を行なうことを禁じる。

## 引用文献

- 木戸敏郎編 1990『声明 1』(『日本音楽叢書』3)音楽之友社  
浄土宗総合研究所監修 2004『浄土宗聲明CD 祖山流と縁山流』  
B. C. デーヴァ(中川博志訳)1994『インド音楽序説』東方出版



◆入館料 無料

◆開館時間

午前10時～午後5時30分  
※入館は午後5時まで

◆休館日

日祝日他、大学の定める休日  
※特別展開催期間中は開館

◆交通案内

- 市バス 59号系統(一部)  
「広沢池・佛大広沢校前」下車すぐ
- 市バス 10・26・59号系統  
「山越」下車 西へ徒歩約13分
- 市バス 91・93号系統 京都バス 81・83号系統  
「広沢御所ノ内町」下車 北へ徒歩約8分



# 佛教大学宗教文化ミュージアム

Bukkyo University Museum of Religious Culture

〒616-8306 京都市右京区嵯峨広沢西裏町 5-26 TEL (075)873-3115(代)